

平成30年6月25日現在

機関番号：32657

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02018

研究課題名(和文)メルロ＝ポンティ芸術論と存在論の可能性

研究課題名(英文)Study on the Possibility of the Ontology and the Theory of Art by Merleau-Ponty

研究代表者

本郷 均 (HONGO, Hitoshi)

東京電機大学・工学部・教授

研究者番号：00229246

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：フランスの現象学者・メルロ＝ポンティには三篇の芸術論がある。このいずれも基本的には絵画を対象としたものである。特に晩年の芸術論でメルロ＝ポンティは、セザンヌだけでなくクレーからも大きな影響を受けている。クレーの絵画においては、音楽は重要な意味を持っていた。しかし、メルロ＝ポンティの芸術論においては、音楽は扱われていない。

そこで、同じくフランスの哲学者でメルロ＝ポンティと同時代人であるジャンケレヴィッチの音楽論と、同じくフランスの現象学者で音楽に極めて近接しつつ音楽について語らないミシェル・アンリ『見えないものを見る』とを接近させて考察し、メルロ＝ポンティの不在の音楽論への接近を試みた。

研究成果の概要(英文)：French phenomenologist Merleau-Ponty has three papers on art. They are basically targeted at paintings. In his later years, Merleau-Ponty was greatly influenced not only by Cezanne but also by Paul Klee. In Klee's paintings, music had an important meaning. However, in Merleau-Ponty's theory of art, music is not treated. So, I considered with Vladimir Jankélévitch who treats the music and also Michel Henry's "Voir l'invisible", which was close to music while not talking about it.

研究分野：哲学

キーワード：メルロ＝ポンティ 芸術論 ジャンケレヴィッチ ハイデガー アンリ 存在論

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、これまで2度にわたって受けることができた科学研究補助費(課題番号21520029「メルロ＝ポンティの存在論構想における「芸術」の寄与」、及び課題番号248520027「メルロ＝ポンティ存在論と芸術の位置に関する研究」)の成果を受け継ぎさらに先へと進めるものである。

(2)後者補助金の最後の時期に行った研究では、パウル・クレーとメルロ＝ポンティの関係を考察し、その成果として、クレーの芸術において重要な意味を持つ「音楽」の役割が、メルロ＝ポンティの『眼と精神』においては(他の芸術論においても同様に)表立っていないということが問題として浮上してきた。

(3)また、メルロ＝ポンティ存在論における「肉」の概念が、根本的には言葉と哲学の関係とに関わる側面を持っている。この側面を芸術についての考察によって浮かび上がらせることができるという目論見を得ていた。

2. 研究の目的

(1)言葉と芸術について、ここまで得てきた「中間領域」という概念において考察することで、メルロ＝ポンティが直接論じていない音楽の問題と言葉の問題を、肉の概念と存在とを媒介とすることによって関係づけることができるような方向性を見いだすことが一つの目的である。

(2)その場合、メルロ＝ポンティが音楽について直接論じていないということが一つの障碍となる。そこで、同時代のフランスの哲学者で、メルロ＝ポンティとは近接しつつ微妙に立場の異なるジャンケレヴィッチを介入させる。ジャンケレヴィッチは、音楽と哲学とをほぼ同じ地平で捉えており、その点で、どのようにして音楽について語りうるのか、ということについて明らかにする手がかりになる。

(3)また、メルロ＝ポンティと同じく「現象学」を標榜するミシェル・アンリの芸術論『見えないものを見る』、あるいは論集『生の哲学』に含まれる諸々の芸術論も媒介となる。アンリの芸術論においては、その根底では音楽的な表象を用いつつ、メルロ＝ポンティと同じく音楽が不在である。その境界線を見極めることで、メルロ＝ポンティにおける音楽の位置づけを考える一助になることを明らかにする。

3. 研究の方法

(1)「言語」と「芸術」の関係について、ベルクソン、ハイデガーとメルロ＝ポンティの比較検討を行う。

(2)アンリ『見えないものを見る』のテキスト読解、およびジャンケレヴィッチの音楽論(『音楽と筆舌に尽くせないもの』、『夜の音楽』、『ドビュッシー』、『遙かなる現前』)などのテキストを読解することによって、音楽と

哲学との関係を明確にする。

(3)メルロ＝ポンティにおいて、「芸術」がどのように位置づけられているかについて、検討する。

4. 研究成果

(1)発表論文「「中間」における言葉について」においては、芸術そのものではなく、芸術を語るための言葉を鑄直すことをまず第一の目的とする。そのために、言語を批判的に捉えていたベルクソン、『芸術作品の根源』において、芸術と真理の関係を思索したハイデガー、晩年の「肉」の概念において、哲学と哲学を可能にする言語についてキアスムや可逆性などの語を以て探究したメルロ＝ポンティ、この三者を取り上げた。そして、そのいずれにおいても、この問題が「中間領域」以前の研究で取り出すことのできた芸術作品の成立する場と考えられるものと深く相関していることを明らかにすることで、芸術について語ることの可能性を開示しようと試みた。

まずベルクソンにおいては、「イメージ image」が鍵となる概念である。ベルクソンは、「直観」を重視することはよく知られているが、重要なのはこの直観を「言葉にもたらず」ことは単純に可能ではない、ということである。直観と言葉とのあいだには「近似」はあっても、「共約不可能」だとされるのである。

一方で、ベルクソン自身、常に既に言葉によって自身のテキスト生成を行っているのである以上、この言葉のありようが問題となる。そこで注目できるのは、「言葉を暴力的にねじ伏せる」という彼の表現である。従来表現を暴力的にねじ伏せること、いわば撓めることによって、言葉から指示的な機能を奪い去り、表現的作用へと移行させようとするのである。

このとき、新たな表現作用として現れるこの言葉が、どうして何ごとかを表現することが可能になるのだろうか。ここにイメージの役割があると考えられる。

イメージは、「ものと表象の中間」に位置づけられ、別言すると、「直観の単純さ」と「抽象の複雑さ」(＝言葉)との間に、中間媒介的に働くものとして考えられている。その意味で、ベルクソンにおける哲学の言葉の可能性は、この中間領域としてのイメージによってもたらされていると言うことができる。

さて、それではハイデガーにおいてはどうかだろうか。ここでは、「作品」と「真理」、「亀裂」という概念が焦点になる。

よく知られているように、ハイデガーは芸術の本質を「存在するものの真理がそれ自

体を-作品の-内へと-据えること」として理解する。無論、この真理は、アレーティアすなわち不伏蔵態という意味で解されるそれであるので、芸術が「真理の生成であり生起である」ということにもなる。

この場合、制作者と鑑賞者は、「この真理を創作しつつ見守ること」として一つになっている。そして亀裂は、同一なものの変異化の働きとして、作品を生じさせることになる。

さて、この段階では、いまだ言葉との関係は顕わにはならない。言葉が問題となるのは、この作品、つまり真理が自らを据えた亀裂において語り出す、ということによってである。ハイデガーは、芸術作品の根源相を「詩作」において見て取ってこのように言う。「すべての芸術は、存在するものそれ自体の真理の到来を生起させることとして、その本質においては、詩作である。詩作が、「何かを見えるようにすること」、さらには言葉自体が「存在するものの開け」として真理の到来を生起させるからである。

この意味で、言葉と芸術作品は等根源的であり、このとき、言葉は、ベルクソンにおけると同様、単なる指示のための言葉ではなく、表現するもの、見えるようにするものとして立ち現れることになる。一方でベルクソンと異なっているのは、ベルクソンではまだ言葉を語る人が使う言葉を自ら暴力を加えるのであったが、ハイデガーの場合には、言葉は自ら語り出すのである。

「見えるようにする」というこの表現は、パウル・クレーにおける「創造についての信条告白」の表現そのままである。メルロ＝ポンティは、晩年の論考『眼と精神』を、ほぼこの表現に導かれつつ書き進めている、と言っても過言ではない。この思想は、特に「肉」という概念において先鋭化する。さらなる手がかりとなるのは、クレーの次の表現「対象的な諸形象はわれわれを見つめる」という点である。

メルロ＝ポンティは、『眼と精神』でアンドレ・マルシャンの「木々が私を見つめ、私に語りかける」という一節を引いている。こうしたキアスム的な関係、可逆性が生じてくる生成的な場として考えられるのが「肉」である。

この「肉」の概念は、メルロ＝ポンティにとって初期から常に導きの糸であり、何度も捉え返すことになったフッサールの言葉：「まだ無言の[...]経験を、固有の意味の純粹な表現にもたらすことが肝要である」がいかにして可能であるかを、突き詰めたものと言ってよい。というのは、「哲学とは、沈黙と言葉とが相互に転換することである」が、この無言の経験の沈黙とその表現たる言葉の両者を関係づけるものこそ「肉」だからである。

この「肉」が、これまで見てきた、ベルクソンにおける言葉の問題、ハイデガーにおける芸術作品の問題と通底する場を開いていることは容易に見て取られるであろう。

ハイデガーにおいても、またメルロ＝ポンティにおいてもこのような言葉は、決して、「哲学者が組織する」のでもなく「諸々の語を哲学者が集めて組み立てる」のでもない。あくまで「哲学者を通して結びつく諸々の語」によって生起するものである。

しかしさらに注意すべきは、このとき、哲学者なるもの、あるいは画家や作家なるものは単なる媒体なわけでもない、ということである。ベルクソンがイマージュとして捉えたところ、ハイデガーが作品として捉えたところが、メルロ＝ポンティにおいては肉として捉え返されていることになるが、この肉には「厚み」があり、これが完全な反転、つまり、言うなれば「完全な表現」を妨げているのである。ここには、切迫しつつも常に未完に終わる試み(のみ)があることになる。この肉の中間領域性は、従来は透明なものとして見過ごされてきたところである。これをメルロ＝ポンティは、「これまでこれは名指されたことがない」というのであるが、これをその厚みにおいて捉えることによって、ベルクソンが言っていた「共約不可能性」もその所以が明らかになると言えよう。それと同時に、作品が見えるようにすることである所以も同時に理解されうることになる。

以上のことから、言葉が言葉として語り出す場面、およびそのことが、哲学を可能にしてくる状況を、肉という中間領域として考えることができる、という結論を得た。

(2)次に、上記で得られたこの言葉のありようが、音楽芸術の在りようにおいてはどのように立ち現れうるのか、この点を検討すべく、発表論文 においては、直接にメルロ＝ポンティには向かわず、ミシェル・アンリの芸術論『見えないものを見る』とジャンケレヴィッチの音楽の哲学を比較検討した。

こうすることによって、音楽にきわめて近接しつつ音楽を語らないアンリと音楽について語るジャンケレヴィッチとの一つの共通性を取り出すことができた。そして、これが実はメルロ＝ポンティの哲学においては語られていない影として考えることができるだろう、という見通しを付けることができた。

ミシェル・アンリ『見えないものを見る』は、カンディンスキーの『抽象芸術論』、『点と線から面へ』などの抽象絵画論に依拠しながら、抽象芸術と「生」の問題を掘り下げたアンリの芸術論である。

過去にもこの著作に関しては、「直接性の

隔たり」(『ミシェル・アンリ研究』第2号)において論じたことがあり、そこで最後に提出した「なぜアンリは音楽について語らなかったのか」という問いが、今回さらに追求されることになる。この問いが出来する所以は、a)アンリが依拠しているカンディンスキーは、ウィーン楽団のリーダーにして12音技法の創始者シェーンベルクと親交を結んでおり、かつ、カンディンスキー自身も音楽について深い造詣を持っていること(著作を瞥見すればこのことは明かである)、また、b)カンディンスキーが理論的な展開を行う際に依拠している哲学的芸術論はショーペンハウアーであり、その芸術論がロマン派の音楽を一つの標準として考えていること、そしてアンリ自身も関説していること、この二点に基づく。

特にショーペンハウアーは、音楽を説明することに成功すれば、それが真の哲学になる、という主旨のことを主著『意志と表象としての世界』において述べている。この考え方は、それ自体目に見えない、つまり対象的ではないあり方をして生、これを問おうとするアンリの意図にもよく沿うものになっている筈である。にも関わらず、アンリは音楽ではなく絵画へと向かうのである。そこにはどのような理由、意味があるのだろうか。

ところで、ここでは、アンリのテキストに現れる「夜」という語に着目する。まず、「夜」が、何よりも「見えない」とことと関連していることは明かであろう。つまり、対象的な(狭くいえば視覚的な)媒介を経ることのない直接性について語ろうとするアンリにとって、夜は本質の住処である。すでに、アンリの主著『現出の本質』においてパルメニデス以来の考え方として、昼と夜(光と闇)を、現象と本質の二項対立として取り出されてきている。しかし、アンリ自身は、このような対立を認めるわけではない。そこでは、エックハルトの言う闇の中で輝く真の光として考えられている。

このパラドクスを検討するに当たって、ここでジャンケレヴィッチを援用する。

ジャンケレヴィッチは、音楽は夜に属するものだ、という。やはり闇の中では聴くしかないからである。しかしこの闇、夜は、決して音楽が鳴り響いているわけではなく、むしろはじまりの沈黙として捉えられる。これはまた「何も意味しない」、つまり、対象的な何かを指示するようなことはしない、という意味での沈黙としても解される。その時、このような意味での沈黙としての音楽が伝えてくれるものは神秘だ、とジャンケレヴィッチは考える。神秘とは、単にわけの分からないものを意味するわけではなく、むしろ「筆舌に尽くせないもの」を意味する。つまり、

どれだけ語ってもいよいよ語るべき事が湧出して来、その意味で、表現においてつねにその表現を越え出してしまうことになる。その点で、先に見た言葉の問題と結びつけて考えるべき問題を提起していることになる。

そして、この沈黙は、(ジャンケレヴィッチのキーワードの一つである)「ほとんど無のたわむれ」として取り出される。このほとんど無が重要なのは、あくまでも無へと接しつつ無ではない、その意味での境界を捉えている、という点である。

アンリにおいては、この境界は境界としてではなく隔絶したものとしてとらえられ、接点などもありうることすら考えられていない。ジャンケレヴィッチのほとんど無に位置づけられる音楽とそれについての語り、一方、ほぼ同じものを捉えつつ、その境界という接点よりも隔たりを強調するアンリが音楽についての語りを行わないことは、並行的なあり方として考えることができるだろう。

ジャンケレヴィッチは、音楽における「グリザイク」を音楽が消え去るところに見、その点でほとんど無の色彩を灰色と見ていけると言える。一方、パウル・クレーは、灰色を無、ただし、存在するかもしれぬ無の色としている。それがまた、クレーのよく知られた「生まれていないものたちと死者たちの国」という「中間の世界」であってみれば、すでに、上記の論文で示したように、これが芸術の創造性の根源的な場所ということが出来る。

以上のことから、アンリ、ジャンケレヴィッチ、さらにクレーは、根本的には同じ場所に立っていることが理解される。しかし、ここでみてとられる「ほとんど」を、アンリは「闇の中で輝く真の光」というパラドクスとして捉える。このとき、両者の中間が透明なものとして現れなくなっているのではないが。そしてこのことが、アンリにおいては音楽が語られない要因の一つであると考えられる。

これまでの議論の相関において目立つのは、アンリにおいては「詩」や「言語」がほとんど主題化されていない、という特徴である。言うなれば言語論を欠いている。このことは、一方でメルロ＝ポンティが肉においては、哲学と言語との反転関係を見ていたことと比してみると、アンリとメルロ＝ポンティにおいて、音楽が語られないことの意味も、異なる理由をもつものであることを予想させることになる。

一方、メルロ＝ポンティの言語論において、沈黙はキーワードの一つとなっている。この沈黙は、ジャンケレヴィッチの音楽の哲学における沈黙と通じるところがある。その意味

で、言語の問題はやはり一つの焦点となっていることは間違いないものと思われる。

今後、この点の解明を期すところである。

(3)「図書」の業績について

今回の研究期間中に、今回の補助金と間接的に関係する図書への寄稿と編集に携わったので、併せて報告する。

『続・ハイデガー読本』に寄稿した「サルトル、メルロ＝ポンティ」においては、特にハイデガーとメルロ＝ポンティの比較において、身体性の問題を焦点として両者の差異について考察しているが、この際、本補助金のテーマの一つであったハイデガーとの比較の成果を援用している。

『リクール読本』に寄稿した「フランス現象学の神学的転回」においては、ミシェル・アンリの記述の箇所、やはり本補助金のテーマの一つであったアンリとの比較の成果を援用している。

『現代フランス哲学に学ぶ』は、放送大学用のテキストであるが、この中のメルロ＝ポンティに関する2章分の記述は本補助金によるメルロ＝ポンティ研究によって得られた成果に多くを負っている。

『メルロ＝ポンティ哲学者事典・別巻』には、編者としても参加しつつ「メルロ＝ポンティ」を寄稿した。これはと同じく、本補助金によるメルロ＝ポンティ研究の成果に多くを負うものである（なお、この事典の1～3巻は翻訳であり、全巻にわたって翻訳と編集に当たっている）。

『メルロ＝ポンティ読本』「眼と精神」については、本補助金の研究テーマそのものと深く関わる内容である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

本郷均、「夜と音楽」、『ミシェル・アンリ研究』ミシェル・アンリ哲学会、査読有、2017、pp.63-86

本郷均、「「中間」における言葉について」、『フィロソフィア』第104号、早稲田大学哲学会、査読有、2017、pp.119-135.

〔学会発表〕(計1件)

本郷均、ミシェル・アンリ哲学会第八回研究大会シンポジウム提題「夜と音楽」、2016.6.11 於龍谷大学

〔図書〕(計5件)

本郷均、「眼と精神」松葉祥一、本郷均、廣瀬浩司編著、『メルロ＝ポンティ読本』、法政大学出版局、2018、pp.197-208

本郷均、「メルロ＝ポンティ」、加賀野井秀一・伊藤泰雄・加國尚志・本郷均共編著、『メルロ＝ポンティ哲学者事典・別巻』、白水社、2017、pp.190-209

本郷均他、『現代フランス哲学に学ぶ』、放送大学教育振興会、第5～8章、2017、pp.79-134

本郷均、『フランス現象学の神学的転回』、島徹・越門勝彦・川口茂雄編、『リクール読本』、法政大学出版局、2016、pp.354-355

本郷均、『サルトル、メルロ＝ポンティ』、富克哉・阿部浩・古荘真敬・森一郎編、『続・ハイデガー読本』、法政大学出版局、2016、pp.212-219.

6. 研究組織

(1)研究代表者

本郷 均(HONGO, Hitoshi)

東京電機大学・工学部・教授

研究者番号：00229246

(2)研究分担者

(3)連帯研究者

(4)研究協力者